30 年センター試験　ビジュアルデータ分析

“基幹3教科”平均点合計(600 点満点)

「国語＋数学(Ⅰ・A+Ⅱ・B)＋英語」は、6.8点ダウンの334.8点(得点率 55.8%)！

○ 国語−2.3 点、数学Ⅰ・A+0.8 点、数学Ⅱ・B−1.0 点、英語−4.3 点
○ 平均点：英語「リスニング」“過去最低”／倫政経・地学基礎“過去最高”
○ 受験者：地歴“増”／公民“増”／理科「基礎科目」“増”・「発展」“減”

旺文社　教育情報センター　30 年 2 月

30 年センター試験は 1 月 13 日(土)・14 日(日)本試験、1 週間後に追・再試験が実施された。志願者数 58 万 2,671 人(前年比 1.2%増)、受験者数 55 万 4,212 人(同 1.2%増)で、ともに 3 年連続の増加である。

大学入試センターから発表された実施結果を基に、過去のデータも含めてセンター試験の実施結果を様々な角度から分析し、以下にビジュアルデータとしてまとめた。

■「教科・試験枠」別の受験選択率

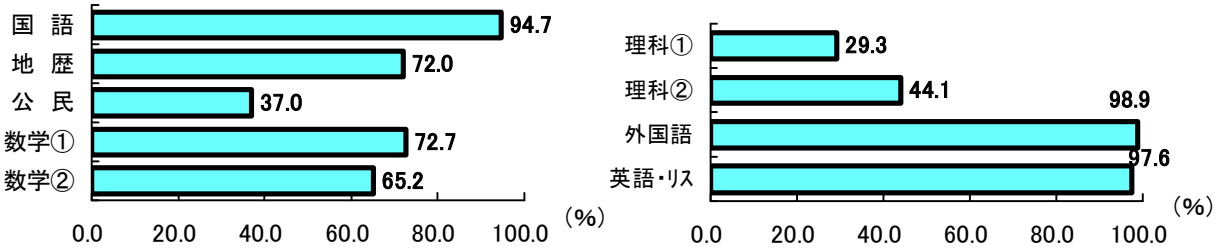
◎　各「教科・試験枠」別の受験者数の全受験者数(55 万 4,212 人。追・再試験含む実数)に占める割合(受験選択率＝各「教科・試験枠」受験者数÷全受験者数×100)をみてみる。

例年、センター試験(以下、セ試)受験者のほとんどが受験する外国語(筆記)受験者は 54 万 7,996 人で、受験選択率は 98.9%、英語のリスニングは 97.6%。国語は 94.7%であった。

27 年からの現行課程先行実施で大きく変わったセ試「理科」の科目構成は、理科 4 領域において、それぞれ「基礎を付した科目」(標準 2 単位：以下、「基礎科目」)4 科目と「基礎を付していない科目」(標準 4 単位：以下、「発展科目」) 4 科目の計 8 科目からなる。「基礎科目」は理科①の試験枠に配置され、「発展科目」は理科②の試験枠に配置されている。

理科①(基礎科目)の受験者数は約 16 万 2,000 人(前年比 3.8%増)で、セ試全受験者数に占める受験選択率は 29.3%／理科②(発展科目)の受験者数は約 24 万 4,000 人(前年比 1.2%減)、受験選択率 44.1%である。「基礎科目」の受験者数は前年に引き続き増え、受験選択率もアップしたものの、受験選択率は 27 年の実施開始以降、4 年連続、全「教科・試験枠」中で最も低い。

●センター試験「教科・試験枠」別の受験選択率（追・再試験含む）



注. ①「教科・試験枠」別の受験選択率＝各「教科・試験枠」受験者数÷全受験者数×100。
② 各「教科・試験枠」の受験者数は実受験者数。全受験者数は554,212人。
③ 理科①は「基礎科目」、理科②は「発展科目」。／ ④ 外国語は英語を含む筆記試験、「英語・リス」は英語のリスニング。

(c)2018 旺文社 教育情報センター

■基幹3教科の平均点合計

◎　セ試平均点には地歴、公民、理科「発展科目」における各科目の「第 1 解答」(100 点満点)と「第 2 解答」(100 点満点)の得点、理科「基礎科目」(50 点満点)の“2 科目受験必須”の得点が混在し、それらの教科における各科目の平均点の実態は把握しにくい。

そのため、平均点の動向をみる一つの視点として、国公立大の文系・理系に共通の“基幹 3 教科”である国語、数学、英語の平均点合計を大学入試センターから発表された科目別平均点等の「確定値」を基に算出した。

国語／数学(数学Ⅰ・A＋数学Ⅱ・B)／英語の平均点合計(600 点満点)は、次のとおり。

国語＋数学(数学Ⅰ・A＋数学Ⅱ・B)＋英語＝３３４．８点（得点率５５．８%）

＜前年差：得点＝－6.8 点、得点率＝－1.1 ポイント＞

■「5教科6科目」の加重平均点

◎　国公立大受験のセ試科目の標準の目安となる、文系・理系に共通な「5 教科 6 科目」(国語／地歴・公民＜合わせて 1 科目＞／数学＜数学①と数学②の 2 科目＞／理科＜理科①・理科②合わせて 1 科目＞／外国語)の加重平均点(800 点満点)を算出した。

30 年の結果は、次のとおりである。

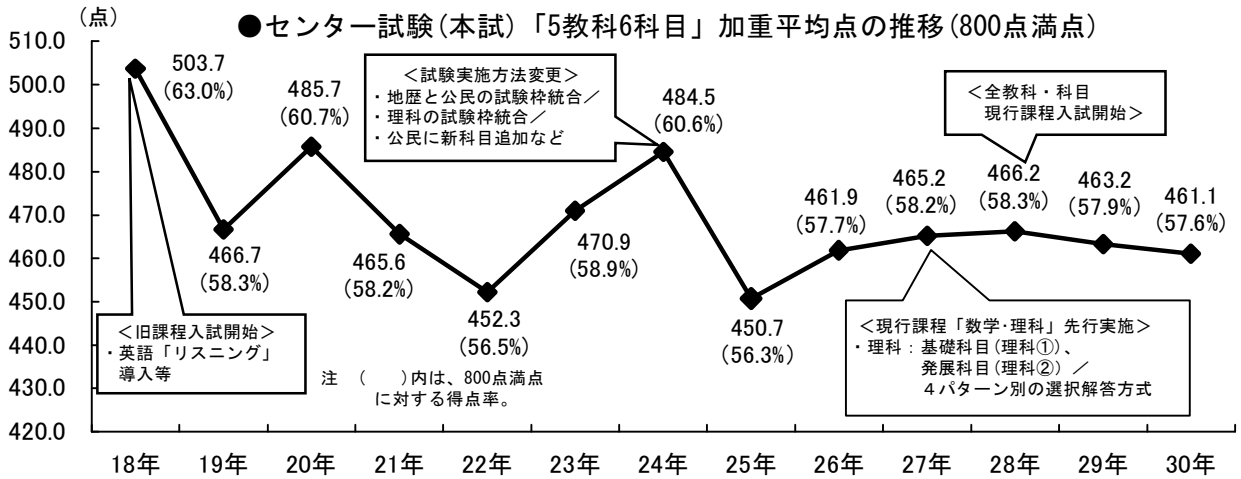
「５教科６科目」(800 点満点)＝４６１．１点（得点率５７．６%）

＜前年差：得点＝－2.2 点、得点率＝－0.3 ポイント＞

これまでのセ試「5 教科 6 科目」の加重平均点の推移をみると、学習指導要領改訂に伴う出題教科・科目や内容等の変更、実施方法の変更などの初年度は、概して平均点は高めになる傾向がある。

前回の新課程入試(18 年。英語にリスニング導入など) の「5 教科 6 科目」加重平均点は 503.7 点(800 点満点：得点率 63.0%)と、この 12 年間では最も高い。24 年の実施方法等の大幅変更(地歴・公民、理科の試験枠統合、公民に新科目設置など)の際は、484.5 点(同 60.6%)であった。27 年の現行課程「数学・理科」先行実施では、理科の実施方法が複雑・多様化され、平均点は 465.2 点(同 58.2%)に留まり、さほど上昇しなかった。

また、28 年の全教科・科目の現行課程による全面実施でも前年より 1.0 点アップの 466.2 点(同 58.3%)に留まった。



注．大学入試センター発表の各科目別平均点と受験者数(本試験。理科「基礎科目」は追・再試験含む)から算出。国語(200点満点)の平均点／地歴と公民を合せて1教科・1科目とした加重平均点(100点満点)／数学①の加重平均点(100点満点)／数学②の加重平均点(100点満点)／理科①と理科②の加重平均点(100点満点：「基礎科目」＜50点満点＞は２科目受験者＜100点満点：追・再試験含む＞の加重平均点)／外国語の加重平均点(200点満点)を合計(800点満点)。18年と27年は旧課程対応の「経過措置」科目(旧課程科目)含む。27年は「得点調整」後の平均点。

(c)2018 旺文社 教育情報センター

平成30年度　大学入試センター試験（本試験）　平均点等一覧［確定］

＜平成30年2月1日　大学入試センター発表＞

教　科		科　目		平成30年 受験者数	平成30年 平均点	平成29年 受験者数	平成29年 平均点	前年差 受験者数	前年差 平均点
基幹3教科　平均点合計（600点満点） 【国語＋数学Ⅰ・A＋数学Ⅱ・B＋英語(200点換算)】				― （得点率）	**334.8** 55.8%	― （得点率）	341.6 56.9%	― （得点率差）	**▲ 6.8** ▲1.1ﾎﾟｲﾝﾄ
国語（200点）		国語		524,724	104.7	519,129	107.0	5,595	▲ 2.3
地理歴史・公民	地理歴史（100点）	世界史A		1,186	39.6	1,329	42.8	▲ 143	▲ 3.3
		世界史B		92,753	68.0	87,564	65.4	5,189	2.5
		日本史A		2,746	46.2	2,559	37.5	187	8.7
		日本史B		170,673	62.2	167,514	59.3	3,159	2.9
		地理A		2,315	50.0	1,901	57.1	414	▲ 7.1
		地理B		147,026	68.0	150,723	62.3	▲ 3,697	5.6
	公民（100点）	現代社会		80,407	58.2	76,490	57.4	3,917	0.8
		倫理		20,429	67.8	22,022	54.7	▲ 1,593	13.1
		政治・経済		57,253	56.4	54,243	63.0	3,010	▲ 6.6
		倫理、政治・経済		49,709	73.1	50,486	66.6	▲ 777	6.5
数学	数学①（100点）	数学Ⅰ		5,877	33.8	6,156	34.0	▲ 279	▲ 0.2
		数学Ⅰ・数学A		396,479	61.9	394,557	61.1	1,922	0.8
	数学②（100点）	数学Ⅱ		5,764	26.0	5,971	25.1	▲ 207	0.9
		数学Ⅱ・数学B		353,423	51.1	353,836	52.1	▲ 413	▲ 1.0
		簿記・会計		1,487	59.2	1,482	49.8	5	9.3
		情報関係基礎		487	59.4	524	54.9	▲ 37	4.4
理科	理科①（50点）	物理基礎		20,941	31.3	19,406	29.7	1,535	1.6
		化学基礎		114,863	30.4	109,795	28.6	5,068	1.8
		生物基礎		140,620	35.6	136,170	39.5	4,450	▲ 3.9
		地学基礎		48,336	34.1	47,506	32.5	830	1.6
	理科②（100点）	物理		157,196	62.4	156,719	62.9	477	▲ 0.5
		化学		204,543	60.6	209,400	51.9	▲ 4,857	8.6
		生物		71,567	61.4	74,676	69.0	▲ 3,109	▲ 7.6
		地学		2,011	48.6	1,660	53.8	351	▲ 5.2
外国語（200点）		英語	筆記（200点）	546,712	123.8	540,029	123.7	6,683	0.0
			リスニング（50点）	540,388	22.7	532,627	28.1	7,761	▲ 5.4
			筆+リ（200点換算）	―	117.1	―	121.5	―	▲ 4.3
		ドイツ語		109	136.8	116	128.7	▲ 7	8.2
		フランス語		109	134.8	134	142.6	▲ 25	▲ 7.8
		中国語		574	154.9	558	164.9	16	▲ 10.0
		韓国語		146	132.6	185	129.0	▲ 39	3.6

＜注＞

① 英語の平均点（200点）は、「筆記」（200点）＋「リスニング」（50点）の250点満点を200点に圧縮換算。

② 大学入試センター発表の科目別平均点は小数第2位の表示だが、旺文社では小数第1位で表示。

③ 表中の「平均点対前年差」は、四捨五入の関係で「30年－29年」と一致しない場合もある。
▲印は「ダウン」(平均点)、および「減」(受験者数)を示す。

④ 地歴（各B科目間）、公民（「倫理、政治・経済」除く、各科目間）、理科②（発展科目間）における得点調整は、「倫理」－「政治・経済」の11.4点が最大で（地学は受験者数が1万人未満のため対象外）、実施されなかった。

旺文社　教育情報センター（平成30年2月1日）

(c)2018 旺文社 教育情報センター

■英語；筆記 ±0 点、リスニング -5.4 点で、「筆記＋リスニング」は 4.3 点ダウン／リスニングは 18 年導入以降、“過去最低”の得点率 45.3%！

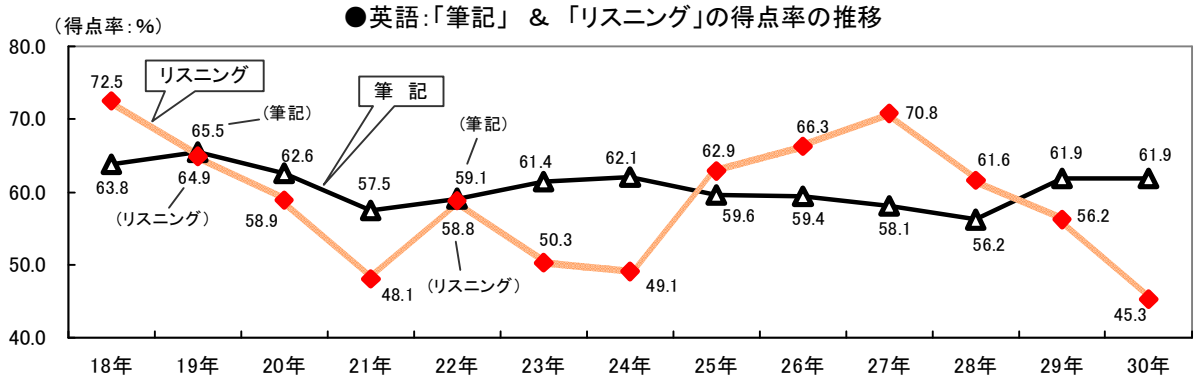
◎　30 年の英語の平均点は筆記が 0.02 点アップ(3 ページの平均点一覧では四捨五入の関係で 0.0 点と表示)、リスニングが 5.4 点ダウンし、全体(筆記＋リスニング：250 点満点を 200 点満点に圧縮換算)では 4.3 点ダウンの 117.1 点だった。

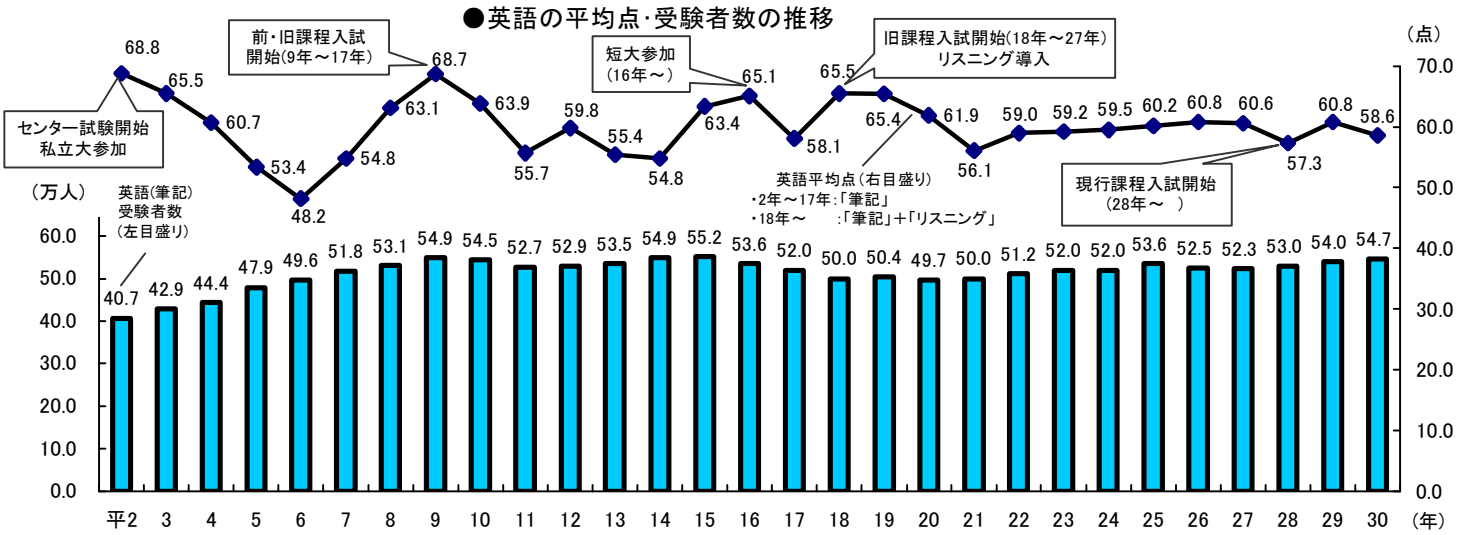
平成 2(1990)年のセ試開始から 30 年までの英語の平均点(2 年～17 年までは筆記のみ、18 年以降は筆記＋リスニング)の推移をみると、6 年に過去最低の 96.4 点(得点率 48.2%)を記録した後、V 字回復で得点率は概ね 5 割台半ば～6 割台を推移。25 年～27 年は 6 割を維持したが、28 年は割り込んだ。29 年は 121.5 点(同 60.8%)で、2 年ぶりに 6 割台を回復したが、30 年は 117.1 点(同 58.6%)で再び 5 割台に下降した。

◎　最近の筆記は、24 年の 124.2 点(得点率 62.1%)以降、28 年の 112.4 点(同 56.2%)まで 4 年連続ダウンした。しかし、29 年は 123.73 点(同 61.9%)で 5 年ぶりにアップし、30 年も 123.75 点(同 61.9%)で前年平均点を維持した。

一方、リスニングは、18 年の導入時に平均点 36.3 点(50 点満点、得点率 72.5%)の高得点を示した後、21 年の 24.0 点(同 48.1%)まで 3 年連続で急降下。最近は 27 年の 35.4 点(同 70.8%)から 3 連続ダウンして 30 年は“過去最低”の 22.7 点(同 45.3%)だった。

◎　例年、セ試受験者数で最も多い筆記の受験者数は、15 年の約 55 万人をピークに 28 年まで 50 万人前後～53 万人台で推移。29 年に 54 万人を若干超え、30 年は約 54 万 7,000 人。





注. ①　折れ線グラフは、平成2年～17年における「筆記」(200点満点を100点満点に換算)の平均点、18年以降における「筆記」(200点満点)＋「リスニング」(50点満点)の平均点(250点満点を100点満点に圧縮換算)を表示。　　②　棒グラフは、「筆記」の受験者数を表示。

(c)2018 旺文社 教育情報センター

■国語；平均点は-2.3 点の 104.7 点。得点率は 2 年連続 50%台前半で低迷！

◎　セ試では英語に次いで受験者の多い国語について、9 年～30 年の平均点（下図は 200 点満点を 100 点満点に換算）と受験者数、及び共通 1 次試験も含めた得点率の推移を下図に示した。

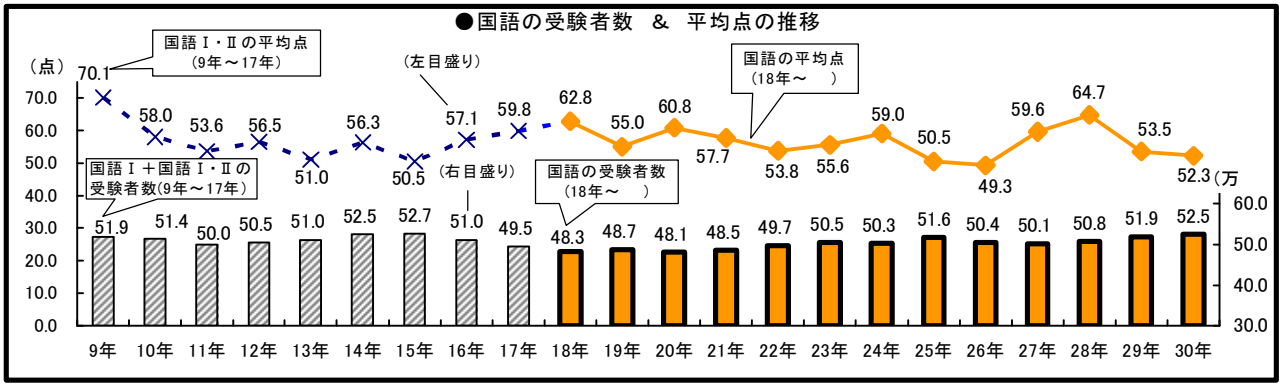
◎　9 年の国語Ⅰ・Ⅱ（9 年～17 年までは、国語Ⅰと国語Ⅰ・Ⅱの 2 科目。受験者数は圧倒的に国語Ⅰ＜国語Ⅰ・Ⅱ）の平均点は 140.2 点と高得点であったが、10 年には大幅にダウン。その後は 100 点台～110 点台のアップ・ダウンを繰り返し、15 年には 101.1 点の低得点を記録。

24 年は得点率を 60%直前まで回復していたが、25 年は現代文の難化で、それまでの最低点（15 年の 101.1 点）より若干低い 101.0 点となった。26 年は、古文の難化などで平均点は 98.7 点まで下降。共通 1 次試験（昭和 54＜1979＞年～平成元年＜1989＞年：11 回実施）とセ試（平成 2 年～）を通して初めて平均点（得点率）が 50%を割り、過去最低となった。

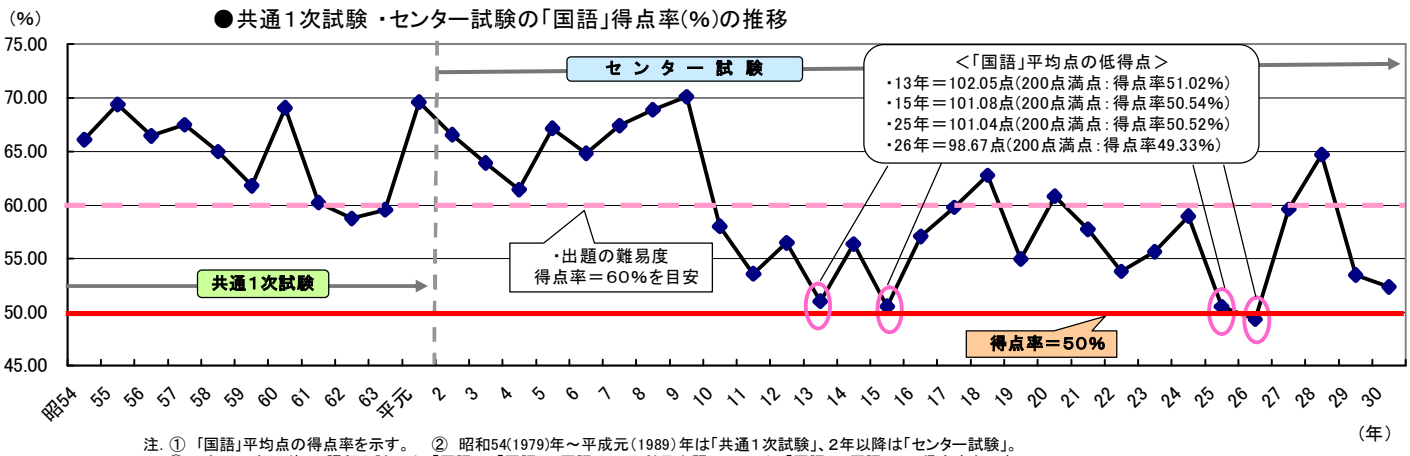
◎　28 年は得点率が 60%台に達したが、29 年は再び下降して得点率は 53.5%。30 年も平均点が 2.3 点ダウンして 104.7 点となり、得点率はさらに下降して 52.3%だった。

◎　国語の得点率は、概して「共通 1 次」時代と「セ試」時代の前半（平成 9 年まで）はほぼ 60%以上（昭和 62・63 年はわずかに 60%割れ）の高得点率、それ以降は、ほぼ 50%台半ば～後半で推移。しかし、最近は、25・26 年の急落、27・28 年のＶ字回復、29・30 年の下降といった、平均点の激しいアップ・ダウンが目立つ。

因みに、「共通 1 次」時代における国語の得点率の平均は 64.9%で、得点率 60%未満の試験は 11 回中、2 回のみである。一方、「セ試」時代の国語の得点率の平均は 30 年時点で 58.9%となり、得点率が 60%未満だった試験は 29 回中、18 回に及ぶ。



注１．前・旧課程入試（9 年～17 年）は、国語Ⅰ及び国語Ⅰ・Ⅱの 2 科目出題。旧課程（18 年～27 年）及び新課程（28 年～）入試では、国語 1 科目のみの出題。　　２．200 点満点を 100 点満点に換算。



注．①「国語」平均点の得点率を示す。　② 昭和54(1979)年～平成元(1989)年は「共通1次試験」、2年以降は「センター試験」。
③ 9年～17年の前・旧課程入試では、「国語Ⅰ」「国語Ⅰ・国語Ⅱ」の2科目出題。ここでは、「国語Ⅰ・国語Ⅱ」の得点率を示す。

(c)2018 旺文社 教育情報センター

■数学；数学Ⅰ・Aの平均点は+0.8 点の 61.9 点、数学Ⅱ・Bは-1.0 点の 51.1 点！

◎　数学は 27 年から現行課程に沿って先行実施され、出題範囲・内容は現行課程の学習指導要領に対応して変更されたが、平均点等の経年比較は新・旧課程の同一名称の科目間でみる。

ただ、27 年の「経過措置」による旧課程「数学」の平均点は除く。

セ試開始(2 年)以降、30 年までの 29 回に及ぶ数学Ⅰ・A(2 年～8 年までは旧・数学Ⅰ)と、数学Ⅱ・B(2 年～8 年までは旧・数学Ⅱ)との平均点の推移を下図に示した。

◎　数学Ⅰ・A(旧・数学Ⅰ含む。以下、同)のこれまでの最低点は 22 年の 49.0 点で、セ試開始以降初めて 5 割を割った。最高点は 12 年の 73.7 点で、最高点と最低点との較差は 24.7 点。

一方、数学Ⅱ・B(旧・数学Ⅱを含む。以下、同)の最低点をみると、現行課程初年度となった 27 年の 39.3 点、最高点は 6 年の 77.2 点で、その較差は 37.9 点に達する。

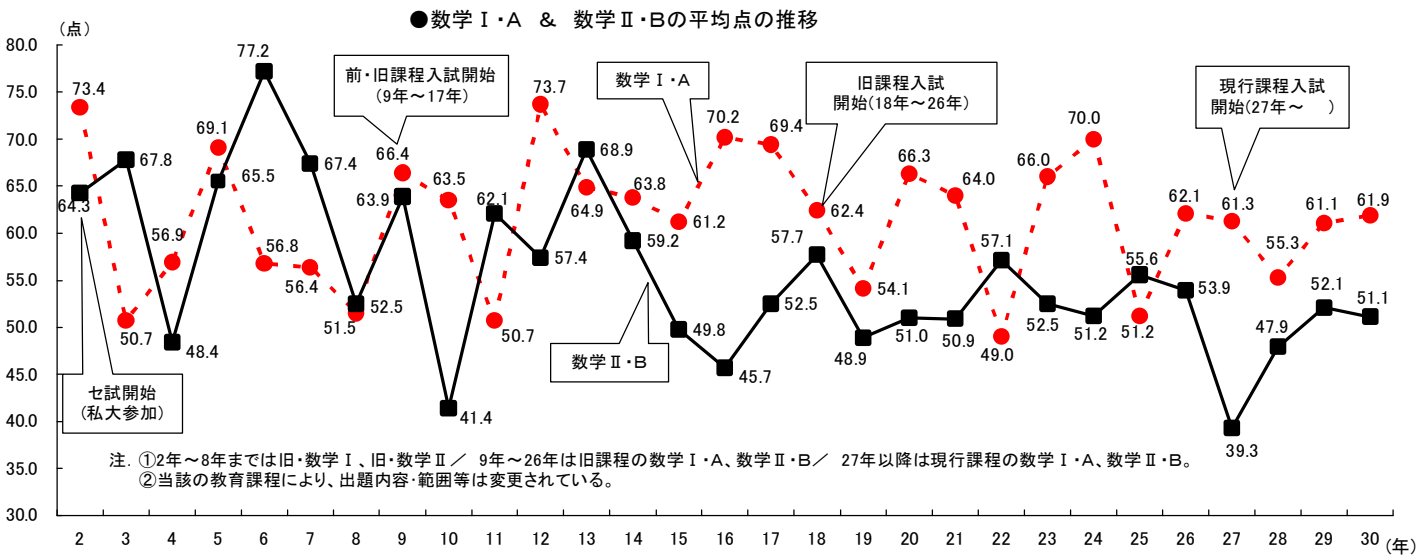
◎　数学Ⅱ・Bの平均点は 30 年も含め、過去 29 回の試験(本試験)で 50 点未満が 7 回もあって変動幅も大きいのに対し、数学Ⅰ・Aの平均点 50 点未満は 22 年の 1 回のみである。

数学Ⅱ・Bは出題範囲が広く、応用問題も出題しやすいため、数学Ⅰ・Aに比べ、難易や問題量などによって不安定な平均点を示しているとみられる。

◎　最近の数学Ⅰ・Aの平均点は、22 年にこれまで唯一の 50 点割れとなった 49.0 点まで急落し、13 年以来 9 年ぶりに数学Ⅱ・Bを下回った。その後、23 年・24 年と 2 年連続上昇して数学Ⅱ・Bを上回った。25 年は大幅ダウンで数学Ⅱ・Bを下回ったが、26 年は大幅アップ、27 年・28 年は 2 年連続ダウンしたものの、29・30 年のアップによって 5 年連続で数学Ⅱ・Bを上回った。

一方、数学Ⅱ・Bは、22 年に数学Ⅰ・Aを上回ったが、23 年・24 年と 2 年連続ダウンした。25 年は 3 年ぶりに上昇して数学Ⅰ・Aを上回ったが、26 年・27 年ともダウンして数学Ⅰ・Aを下回った。特に、27 年は平均点 39.3 点と、過去最低であった。28 年は 8.6 点アップで平均点は 47.9 点、29 年も 4.2 点アップの 52.1 点と 2 年連続アップしたが、30 年は 3 年ぶりのダウンで平均点は 51.1 点となり、数学Ⅰ・Aの平均点を 5 年連続で下回った。

因みに、数学Ⅰ・Aと数学Ⅱ・Bの平均点差は 29 年の 9.0 点差(数学Ⅰ・A＞数学Ⅱ・B)から、30 年は 10.8 点差まで拡大した。



(c)2018 旺文社 教育情報センター

□数学２科目受験は､「数学Ⅰ･A ＋ 数学Ⅱ･B」が約 35 万 3,000 人で､２科目受験者の 97.9%！

◎　30 年の数学(数学①と数学②)の実受験者数は 40 万 3,670 人。そのうち、「1 科目受験者」数は 4 万 3,310 人(実受験者数に占める構成率 10.7%)、「2 科目受験者」数は 36 万 360 人(同 89.3%)である。

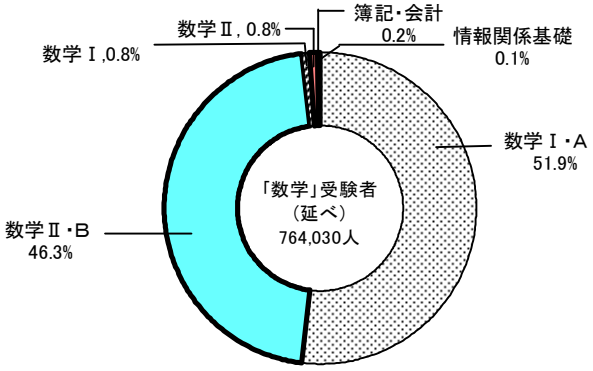
他方、数学①と数学②の延べ受験者数は 76 万 4,030 人。そのうち、数学①の「数学Ⅰ・A」の受験者数は 39 万 6,748 人(延べ受験者数に占める構成率 51.9%)、数学②の「数学Ⅱ・B」の受験者数は 35 万 3,657 人(同 46.3%)である。

また、数学①と数学②の「2 科目受験者」(実受験者数 36 万 360 人)のうち、97.9%を占める 35 万 2,789 人が「数学Ⅰ・A＋数学Ⅱ・B」を受験している。

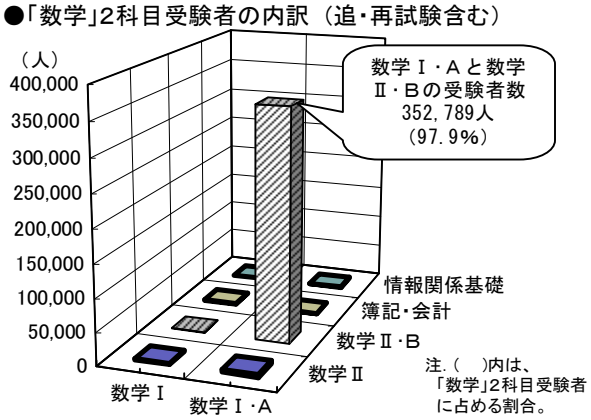
◎　ところで、数学は国公立大入試において、理系のみならず、文系にとっても基幹教科であり、上記のように「数学Ⅰ・A」と「数学Ⅱ・B」が主体となっている。

因みに、30 年セ試受験者数の多い科目をみると、「英語(筆記)」約 54 万 7,000 人／「英語(リスニング)」約 54 万人／「国語」約 52 万 5,000 人／「数学Ⅰ・A」約 39 万 6,000 人／「数学Ⅱ・B」約 35 万 3,000 人となっており、この後に理科(約 20 万人～約 2,000 人)や地歴(約 17 万 1,000 人～約 1,000 人)、公民(約 8 万人～約 2 万人)が続いている。

●「数学」延べ受験者の構成比（追･再試験含む）



●「数学」2科目受験者の内訳（追･再試験含む）



●「数学」２科目受験者：360,360人の内訳

		数　学 ②			
		数学Ⅱ (人)	数学Ⅱ・B (人)	簿記･会計 (人)	情報関係基礎 (人)
数学①	数学Ⅰ	1,491 (0.4%)	591 (0.2%)	274 (0.1%)	47 (0.0%)
	数学Ⅰ・A	4,194 (1.2%)	352,789 (97.9%)	612 (0.2%)	362 (0.1%)

注.(　)内は、「数学」２科目受験者に占める割合。

(c)2018 旺文社 教育情報センター

■地歴・公民;「地歴」B科目の平均点全科目“アップ”。倫政経の平均点は“過去最高”
［地歴、公民］2 科目受験者は約 4,000 人(2.7%)“増加”の約 15 万人！

□ 地歴と公民の受験者動向等

◎ 地歴・公民の試験枠

地歴と公民の試験枠は統合されており、［地歴、公民］（［　］は試験枠を示す。以下、同）の全 10 科目から最大 2 科目の選択が可能である。

ただし、日本史Ａと日本史Ｂなど、同一名称を含む科目同士の組合せ・選択はできない。

◎ 平均点“アップ”は「地歴」Ｂ科目、倫理、倫政経など。“ダウン”は政治・経済など

地歴の平均点は、地理Ｂ+5.6 点（得点 68.0 点）、日本史Ｂ+2.9 点（同 62.2 点）、世界史Ｂ+2.5 点（同 68.0 点）など、受験者の多い“Ｂ科目”は全科目がアップした。受験者の少ない“Ａ科目”は日本史Ａの+8.7 点（同 46.2 点）を除き、世界史Ａ・地理Ａともダウンした。

公民は、倫理が+13.1 点（同 67.8 点）と大幅にアップしたほか、国立難関大の入試科目に多くみられる「倫理､政治･経済」（以下、倫政経。4 単位相当。他の公民科目は 2 単位）が+6.5 点（同 73.1 点）のほか、受験者の多い現代社会は+0.8 点（同 58.2 点）で前年並みだった。

- **倫政経の平均点は“過去最高”**

  30 年セ試「倫政経」（平成 24 年から出題）の平均点 73.1 点は、29 年の 66.6 点を 6.5 点上回り、“過去最高”となった。

◎ 地歴の受験者数は約 4,300 人（1.1%）“増加”。公民は約 4,500 人（2.3%）“増加”！

セ試の全受験者数（55 万 4,212 人。追・再試験含む）が 29 年より 1.2%増加した中、地歴の実受験者数（追・再試験含む）は、29 年より 4,337 人（前年比 1.1%）増の 39 万 8,793 人。全受験者数に占める地歴の「受験選択率」は､29 年と同じ 72.0%である。

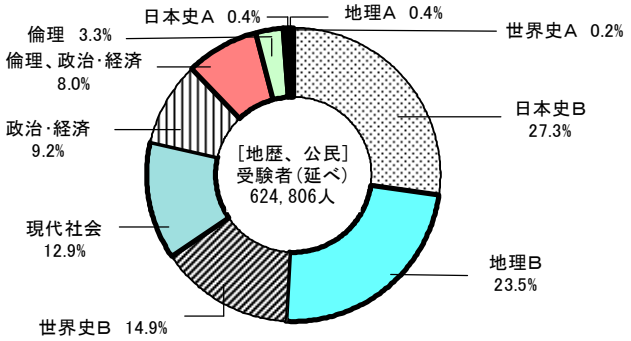
他方、公民の受験者数は､29 年より 4,541 人（同 2.3%）増の 20 万 5,174 人だった。なお、地歴と公民の延べ受験者数は、29 年より 9,523 人（同 1.5%）増の 62 万 4,806 人である。

◎ 公民の受験者“増”の背景

公民の受験者増は、現代社会の 3,917 人（前年比 5.1%）増と政治・経済の 3,010 人（同 5.5%）増によるものである。

現代社会は公民の中では履習率が高く、29 年に平均点がアップ（+2.9 点、得点 57.4 点）したこと、政治・経済は公民の 2 単位科目の中では 29 年の平均点が一番高かった（63.0 点）ことなどが、それぞれ受験者増につながったとみられる。

●［地歴、公民］ 延べ受験者の構成比率（追･再試験含む）



(c)2018 旺文社 教育情報センター

◎「第１解答科目」と「第２解答科目」

地歴、公民の試験枠である[地歴、公民]、及び理科「発展科目」の試験枠である理科②では、それぞれ最大２科目の選択・受験が可能である。

志望大学のセ試利用が“1 科目利用指定”である場合、当該受験生は“本命 1 科目”に絞って「2 科目選択・受験」(2 科目試験枠)を「事前登録」し、“本命 1 科目”の解答に最大 2 倍近い解答時間(120 分程)を掛けることが可能である。つまり、2 科目受験者は「第 1 解答科目」の解答時間を、「第 2 解答科目」(本命科目)の解答に充てることもできる。

こうした、解答時間の“不公平”を是正する観点から、全ての国立大と大半の公立大、一部のセ試利用私立大では、“2 科目試験枠”の受験者が“1 科目利用指定”の学部等に出願した場合、「高得点科目」ではなく、「第 1 解答科目」の成績を合否判定に用いる。

□ [地歴、公民]“2科目受験”の状況

◎　地歴と公民の２科目の実受験者数(追･再試験含む)は､29 年より 3,922 人(前年比 2.7%)増の 15 万 440 人である。2 科目受験者の増加は、セ試受験者の増加に加え、文系志望の増加がうかがえる。

試験枠[地歴、公民]の 10 科目(地歴Ａ＝3 科目、地歴Ｂ＝3 科目、公民＝4 科目)から 2 科目を選択・受験する組合せは、全部で 40 通り(同一名称を含む組合せを除く)になる。

この 40 通りを地歴と公民の 2 教科の組合せで大別すると、次の 3 パターンになる。

(1)「地歴」1 科目 ＋「公民」1 科目受験：約 12 万 9,600 人、86.1%

「地歴」1 科目と「公民」1 科目の組合せによる 2 科目受験者(実受験者。以下、同)は、29 年より 3,274 人(前年比 2.6%)増の 12 万 9,561 人([地歴、公民]2 科目受験者に占める割合 86.1%)で、2 科目受験者の 9 割近くを占める。このタイプの組合せは、24 通りになる。このうち、「地歴Ｂ」と「公民」の受験が 12 万 7,595 人(同 84.8%)で､圧倒的に多い。

科目別の組合せでは、日本史Ｂと現代社会の組合せが 2 万 8,037 人(同 18.6%)／日本史Ｂと政治･経済の組合せが 1 万 8,399 人(同 12.2%)／日本史Ｂと倫政経の組合せが 1 万 6,951 人(同 11.3%)などとなっている。

(1)「地歴」1科目・「公民」1科目受験

①「地歴Ｂ科目」×「公民」受験：127,595人(84.8%)の内訳

		公民			
		現代社会(人)	倫理(人)	政治･経済(人)	倫理、政治･経済(人)
地歴	日本史Ｂ	28,037 (18.6%)	7,410 (4.9%)	18,399 (12.2%)	16,951 (11.3%)
	世界史Ｂ	12,445 (8.3%)	4,670 (3.1%)	7,636 (5.1%)	11,769 (7.8%)
	地理Ｂ	11,304 (7.5%)	1,055 (0.7%)	4,062 (2.7%)	3,857 (2.6%)

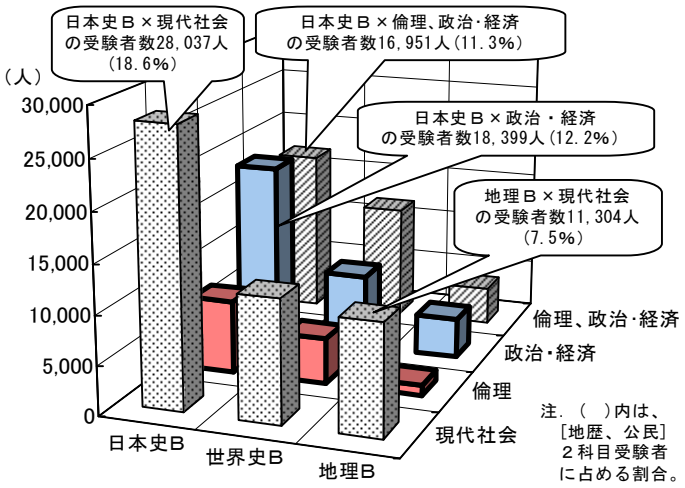
②「地歴Ａ科目」×「公民」受験：1,966人(1.3%)の内訳

		公民			
		現代社会(人)	倫理(人)	政治･経済(人)	倫理、政治･経済(人)
地歴	日本史Ａ	537 (0.4%)	85 (0.1%)	326 (0.2%)	33 (0.0%)
	世界史Ａ	168 (0.1%)	50 (0.0%)	118 (0.1%)	13 (0.0%)
	地理Ａ	433 (0.3%)	30 (0.0%)	159 (0.1%)	14 (0.0%)

注.（　　）内は、[地歴、公民]２科目受験者に占める割合。

(c)2018 旺文社 教育情報センター

●「地歴Ｂ」×「公民」受験者の内訳　（追・再試験含む）



(2)「地歴」２科目受験：約１万 8,100 人、12.1%

24 年セ試から導入されている、地歴と公民の「試験枠」統合の要因にもなった「地歴」２科目受験については、受験者が 29 年より 697 人（前年比 4.0%）増の１万 8,141 人（[地歴、公民]2 科目受験者に占める割合 12.1%）である。

また、「地歴Ｂ」科目同士の２科目受験者は、29 年より 697 人（前年比 4.1%）増の１万 7,800 人（[地歴、公民]2 科目受験者に占める割合 11.8%）に増えた。

「地歴」２科目受験による科目の組合せは、12 通りになる。

科目別の組合せでは、地理Ｂと世界史Ｂの組合せが 7,225 人（[地歴、公民]2 科目受験者に占める割合 4.8%）／日本史Ｂと世界史Ｂの組合せが 7,148 人（同 4.8%）のほか、日本史Ｂと地理Ｂの組合せが 3,427 人（同 2.3%）となっている。

①「地歴Ｂ科目」×「地歴Ｂ科目」受験：17,800人（11.8%）の内訳

		地歴	
		世界史Ｂ（人）	地理Ｂ（人）
地歴	日本史Ｂ	7,148 (4.8%)	3,427 (2.3%)
	世界史Ｂ	—	7,225 (4.8%)

注．（　）内は、［地歴、公民］２科目受験者に占める割合。

②「地歴Ａ科目」×「地歴Ａ科目」受験：115人（0.1%）の内訳

		地歴	
		世界史Ａ（人）	地理Ａ（人）
地歴	日本史Ａ	60 (0.0%)	26 (0.0%)
	世界史Ａ	—	29 (0.0%)

注．（　）内は、［地歴、公民］２科目受験者に占める割合。

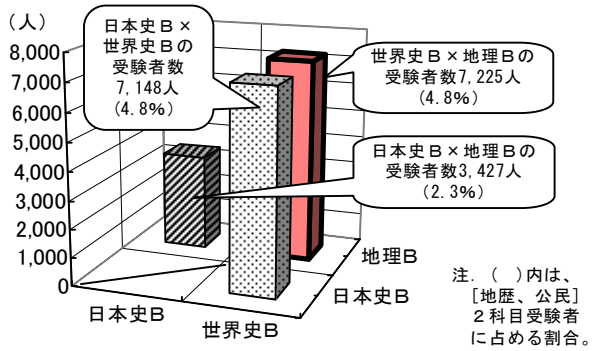
③「地歴Ａ・Ｂ科目」×「地歴Ａ・Ｂ科目」受験：226人（0.2%）の内訳

地　歴	Ａ・Ｂ科目	受験者（人）
日本史	Ａ科目×世界史Ｂ	38（0.0%）
	Ｂ科目×世界史Ａ	61（0.0%）
世界史	Ａ科目×地理Ｂ	41（0.0%）
	Ｂ科目×地理Ａ	36（0.0%）
地　理	Ａ科目×日本史Ｂ	30（0.0%）
	Ｂ科目×日本史Ａ	20（0.0%）

注．（　）内は、［地歴、公民］２科目受験者に占める割合。

(c)2018 旺文社 教育情報センター

●「地歴Ｂ」２科目受験者の内訳（追・再試験含む）



(3)「公民」２科目受験：約 2,700 人、1.8%

「公民」同士２科目の組合せは４通りで、受験者は29年より 49 人（前年比1.8%）減の 2,738 人（[地歴、公民]2 科目受験者に占める割合 1.8%）である。

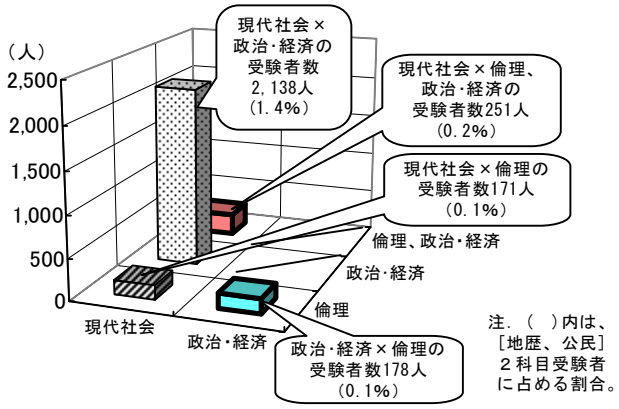
科目別の組合せでは、現代社会を基軸に、政治･経済との組合せが 2,138 人（同 1.4%）／倫政経との組合せが 251 人（同 0.2%）のほか、政治・経済と倫理との組合せが 178 人（同 0.1%）などである。

●「公民」４科目から２科目受験：2,738人（1.8%）の内訳

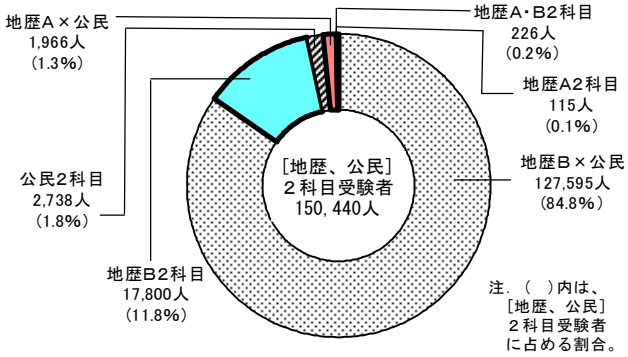
		公民		
		倫　理（人）	政治･経済（人）	倫理、政治･経済（人）
公民	現代社会	171（0.1%）	2,138（1.4%）	251（0.2%）
	政治･経済	178（0.1%）	—	—

注．（　）内は、［地歴、公民］２科目受験者に占める割合。

●「公民」２科目受験者の内訳（追・再試験含む）



●[地歴、公民] 2科目受験者の内訳（追･再試験含む）



(c)2018 旺文社 教育情報センター

■理科;「基礎科目」受験者約 16 万 2,400 人、「発展科目」受験者約 24 万 4,400 人！
「選択パターン」別受験者比率：A＝37%、B＝9%、C＝5%、D＝49%！

□ 「理科」の選択解答方法

27 年から現行課程に対応して先行実施された「理科」は、物理・化学・生物・地学の４領域の各「基礎科目」（標準２単位）を理科①に、各「発展科目」（標準４単位）を理科②に配置し、全８科目を次のようなＡ～Ｄの“４パターン”のいずれかによって選択解答する。

- **Ａ＝「基礎２科目」**：物理基礎、化学基礎、生物基礎、地学基礎から２科目選択解答。（４単位相当）
- **Ｂ＝「発展１科目」**：物理、化学、生物、地学から１科目選択解答。（４単位相当）
- **Ｃ＝「基礎２科目＋発展１科目」**：物理基礎、化学基礎、生物基礎、地学基礎から２科目、及び物理、化学、生物、地学から１科目選択解答。（３科目選択解答：８単位相当）
- **Ｄ＝「発展２科目」**：物理、化学、生物、地学から２科目選択解答。（８単位相当）

◎ 選択解答の留意事項

- 「発展科目」については、旧課程で“選択履修”であった学習項目が現行課程では“必修化”されたが、受験者の大幅な負担増にならないように“一部に選択問題”が配置されている。
- 理科①(基礎科目：50 点満点)については、“1 科目のみの受験は認められない”。試験時間は 2 科目で 60 分。
- 理科②(発展科目：100点満点)の試験時間において2 科目を選択する場合、解答順に「第1解答科目」及び「第2解答科目」に区分して各60分間で解答する。「第1解答科目」と「第2解答科目」の間の答案回収等の時間を含め、合計時間(130分)が試験時間となる。
- 選択解答方法（Ａ～Ｄ）は、出願時に「事前登録」する。
- 選択解答方法Ｃにおける「基礎科目」と「発展科目」の組合せで、同一名称を含む科目同士の選択については制限されず、同一名称を含む科目同士の選択は可能である。

  ただし、セ試を利用する大学(学部)によっては、「基礎科目」と「発展科目」における同一名称を含む科目の組合せを不可としているところがある。

  因みに、地歴と公民では、同一名称を含む科目の組合せで2科目選択はできない。

□ 受験者の動向

◎ 理科①の受験状況

(1)「基礎科目」受験者：前年比 3.8%“増”の約 16 万 2,400 人。「理科」受験者の 39.9%

理科①の「基礎科目」の実受験者数は 16 万 2,409 人で、理科②の実受験者数 24 万 4,390 人との合計 40 万 6,799 人（Ｃパターンの理科①と理科②の重複受験者含む）の 39.9%である。

30 年の「基礎科目」の実受験者数は、前年に比べ 5,928 人、3.8%の増加となった。

「基礎科目」受験者の増加率 3.8%は、セ試受験者数の増加率（前年比 1.2%増）の 3 倍以上に当たり、“文系志望者”の増加がうかがえる。

特に、化学基礎の約 5,100 人（前年比 4.6%）増と生物基礎の約 4,500 人（同 3.3%）増などが目立つ。なお、物理基礎も約 1,500 人増で増加率としては 7.9%の大幅増である。

(c)2018 旺文社 教育情報センター

(2)「基礎科目」の科目別選択率：生物基礎 43.3%、化学基礎 35.4%

理科①の「基礎科目」の延べ受験者数 32 万 4,898 人の受験状況は、次のとおりである。

生物基礎は受験者数 14 万 672 人、理科①の延べ受験者数に占める割合 43.3%／化学基礎は 11 万 4,917 人、同 35.4%／地学基礎は 4 万 8,350 人、同 14.9%／物理基礎は 2 万 959 人、同 6.5%で、「基礎科目」受験は生物基礎と化学基礎が中心となっている。

(3)「基礎２科目」の組合せ：

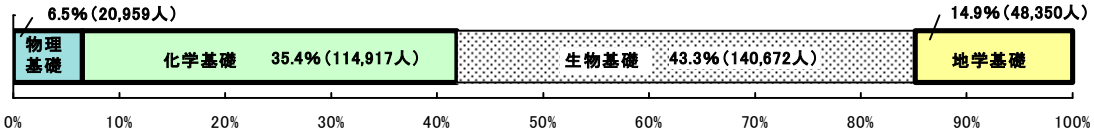
「生物基礎＋化学基礎」58.2% ／「生物基礎＋地学基礎」26.5%など、“文系色”反映！

「基礎科目」は“２科目受験が必須”となっており、受験科目の組合せ状況は、次のとおりである。

「生物基礎＋化学基礎」は受験者数 9 万 4,532 人、科目選択率 58.2%(理科①の実受験者数に占める割合)／「生物基礎＋地学基礎」は受験者数 4 万 3,004 人、同 26.5%／「化学基礎＋物理基礎」は受験者数 1 万 6,441 人、同 10.1%など。

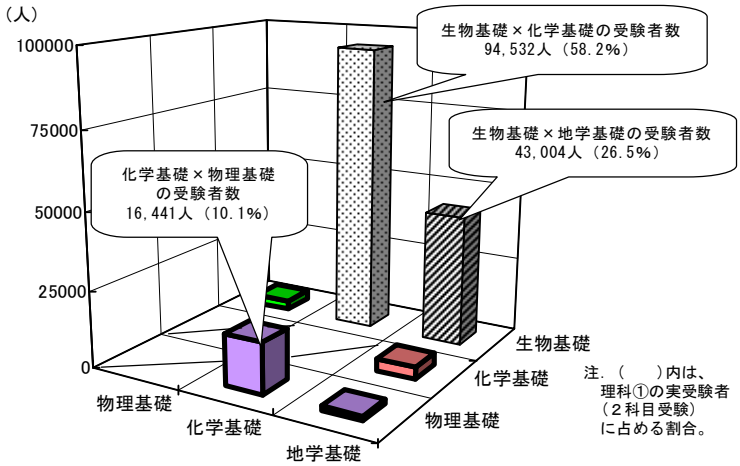
「基礎科目」は、生物基礎を中心に化学基礎や地学基礎との組合せが主体で、 例年同様、“文系志望者”受験を反映した結果となっている。

●理科①受験者の「基礎科目」別選択率（追・再試験含む）



注．科目選択率＝各「基礎科目」受験者数÷理科①延べ受験者数×100

●理科①「基礎２科目」受験者の状況(追・再試験含む)



注．（　　）内は、理科①の実受験者（２科目受験）に占める割合。

●理科①：「基礎２科目」受験者数162,409人の科目選択内訳（追・再試験含む）

		理科①			
		物理基礎(人)	化学基礎(人)	生物基礎(人)	地学基礎(人)
理科①	物理基礎	—	16,441 (10.1%)	3,087 (1.9%)	1,413 (0.9%)
	化学基礎	—	—	94,532 (58.2%)	3,932 (2.4%)
	生物基礎	—	—	—	43,004 (26.5%)

注．（　　）内は、「基礎２科目」実受験者に占める割合。

(c)2018 旺文社 教育情報センター

◎　理科②の受験状況

(1)「発展科目」受験者：約 24 万 4,400 人、「理科」受験者の 60.1%

理科②に配置された「発展科目」の実受験者数は 24 万 4,390 人で、29 年の理科②の実受験者数 24 万 7,287 人に比べ、2,897 人(1.2%)の減少となる。

また、理科①と理科②の実受験者数の合計 40 万 6,799 人(Cパターンの理科①と理科②の重複受験者含む)に占める「発展科目」の実受験者数の割合は 60.1%で、前年より 1.1 ポイント下回った。

(2)「発展科目」の延べ受験者の構成比：

「化学」受験 47.0%、「物理」受験 36.1%、「生物」受験 16.4%など、“理系色”反映！

「発展科目」の延べ受験者数 43 万 5,656 人の各科目の構成比率は、次のとおりである。

化学 47.0%(受験者 20 万 4,707 人)／物理 36.1%(同 15 万 7,312 人)／生物 16.4%(同 7 万 1,623 人)／地学 0.5%(同 2,014 人)。

各科目の構成比率を 29 年と比べると、物理が 0.7 ポイント、地学が 0.1 ポイントそれぞれ上昇し、生物が 0.5 ポイント、化学が 0.3 ポイントそれぞれ下降した。

◎　「選択パターン」別受験状況

(1)　「発展２科目」のＤパターンは受験者“減少”、初の選択率“50%割れ”！

セ試「理科」は、前述のようにＡ～Ｄの４パターンからの選択受験となる。

30 年の各「パターン」別受験者の４パターン実受験者数 38 万 7,594 人に占める割合は、次のとおりである。

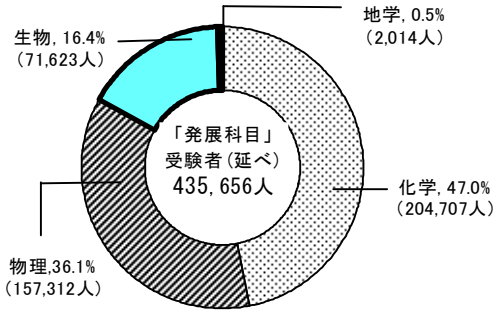
Ａパターン：36.9%(受験者数 14 万 3,204 人)／Ｂパターン：8.8%(同 3 万 3,919 人)／Ｃパターン：5.0%(同 1 万 9,205 人)／Ｄパターン：49.3%(同 19 万 1,266 人)。

「発展 2 科目」選択のＤパターンの受験者数は 29 年より 4,205 人(2.2%)減り、セ試「理科」受験者に占める割合も 1.4 ポイント下降したが、他のパターンは全て 29 年より受験者数増となり、4 パターン合計の受験者数(理科の実受験者数)は、前年より 1,768 人(0.5%)増の 38 万 7,594 人となった。

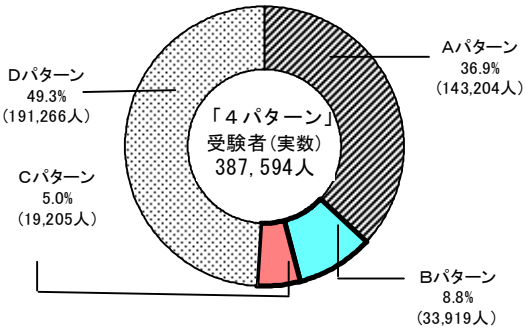
理系志望者の多いＤパターンのみが約 4,200 人(前年比 2.2%)減少し、文系志望者の多いＡパターンが約 4,700 人(同 3.4%)増加したのは、「文高理低」志望のあらわれとみられる。

なお、看護・医療系などにみられる“Ｃパターン”(基礎２科目＋発展１科目：８単位相当)は 29 年より 1,263 人(7.0%)増の 1 万 9,205 人で、「理科」受験者に占める割合も 0.3 ポイント上昇の 5.0%となった。

●理科②「発展科目」延べ受験者の構成比率
(追・再試験含む)



●理科「選択パターン」別受験状況
(追・再試験含む)



(c)2018 旺文社 教育情報センター

(2) A：「生物基礎＋化学基礎」主体 ／ B：物理、化学、生物の１科目選択比率ほぼ“均等”
C：「生物基礎＋化学基礎＋生物」主体 ／ D：「化学＋物理」主体

A～Dの各パターンの科目選択の内訳をみると、およそ次のようになっている。

Aパターンは、「生物基礎＋化学基礎」が 60%近くで主体／Bパターンは物理(約 39%)、生物(約 31%)、化学(約 30%)の１科目選択比率がそれぞれ 30%台でほぼ均等／Cパターンは、「生物基礎＋化学基礎＋生物」が 40%強で主体となっている。また、 Dパターンは「化学＋物理」が 70%強、「化学＋生物」が約 26%である。

●Aパターン：実受験者数143,204人の科目選択内訳（追・再試験含む）

理科①	理科① 物理基礎(人)	化学基礎(人)	生物基礎(人)	地学基礎(人)
物理基礎	—	10,759 (7.5%)	2,355 (1.6%)	1,242 (0.9%)
化学基礎	—	—	83,394 (58.2%)	3,528 (2.5%)
生物基礎	—	—	—	41,926 (29.3%)

注. ① 理科①(基礎科目)から２科目を選択受験。
② ( )内は「Aパターン」の実受験者に占める割合。
③ 太枠、網かけの枠は“選択比率の高い”科目の組合せを示す。

●Bパターン：実受験者数33,919人の科目選択内訳（追・再試験含む）

理科② 物理(人)	化学(人)	生物(人)	地学(人)
13,113 (38.7%)	10,303 (30.4%)	10,331 (30.5%)	172 (0.5%)

注. ① 理科②(発展科目)から１科目を選択受験。
② ( )内は「Bパターン」の実受験者に占める割合。
③ 太枠、網かけの枠は“選択比率の高い”科目の組合せを示す。

●Cパターン：実受験者数19,205人の科目選択内訳（追・再試験含む）

理科②	理科① 物理基礎 化学基礎(人)	物理基礎 生物基礎(人)	物理基礎 地学基礎(人)	化学基礎 生物基礎(人)	化学基礎 地学基礎(人)	生物基礎 地学基礎(人)
物理	2,903 (15.1%)	250 (1.3%)	96 (0.5%)	449 (2.3%)	67 (0.3%)	39 (0.2%)
化学	2,310 (12.0%)	343 (1.8%)	45 (0.2%)	2,403 (12.5%)	81 (0.4%)	104 (0.5%)
生物	438 (2.3%)	134 (0.7%)	5 (0.0%)	8,184 (42.6%)	235 (1.2%)	561 (2.9%)
地学	31 (0.2%)	5 (0.0%)	25 (0.1%)	102 (0.5%)	21 (0.1%)	374 (1.9%)

注. ① 「理科①(基礎科目)から２科目＋理科②(発展科目) から１科目」の選択受験。
② ( )内は「Cパターン」の実受験者に占める割合。
③ 太枠、網かけの枠は“選択比率の高い”科目の組合せを示す。

●Dパターン：実受験者数191,266人の科目選択内訳（追・再試験含む）

理科②	理科② 物理(人)	化学(人)	生物(人)	地学(人)
物理	—	138,707 (72.5%)	1,125 (0.6%)	563 (0.3%)
化学	—	—	50,150 (26.2%)	261 (0.1%)
生物	—	—	—	460 (0.2%)

注. ① 理科②(発展科目)から２科目を選択受験。
② ( )内は「Dパターン」の実受験者に占める割合。
③ 太枠、網かけの枠は“選択比率の高い”科目の組合せを示す。

□ 「理科」平均点

◎ 化学は“8.6 点アップ”で 60.6 点／生物は“7.6 点ダウン”で 61.4 点／物理は“前年並み”の 62.4 点／地学基礎は得点率 68.3%で“過去最高”

文系志望者の受験が多い「基礎科目」の平均点(50 点満点)を得点率でみると、物理基礎 62.6%、化学基礎 60.8%、生物基礎 71.2%、地学基礎 68.3%である。

前年高得点の生物基礎(29 年：39.5 点、得点率 78.9%)が 3.9 点ダウン(得点率 7.7 ポイント下降)したが、他の科目は全て 1.6 点以上アップした。

特に地学基礎は 1.6 点アップの 34.1 点(得点率 68.3%)で、27 年の科目設定以降、“過去最高”となった。

他方、各「発展科目」における平均点(100 点満点)及び前年差は、次のとおり。

物理 62.4 点(-0.5 点)、化学 60.6 点(+8.6 点)、生物 61.4 点(-7.6 点)、地学 48.6 点(-5.2 点)。地学の平均点(48.6 点)は、28 年の 38.6 点に次ぐ過去 2 番目の低得点で、得点率 50%割れは 2 度目である。

(c)2018 旺文社 教育情報センター